



改めて、コロナ禍からの学びを糧に

校長 不破 淳一

令和4年、明けましておめでとうございます。これからの1年が皆様にとって穏やかで幸多き1年となりますようお祈りいたします。今日からの3学期は、次の学年への橋渡しとなる大切な学期です。子供たちと共に一日一日を大切に、確かな歩みを重ねたいと思っています。

今年も、コロナ禍による「特別な日常」の中でのお正月になりました。「特別な日常」は約2年間続いています。昨年は、1月8日から2回目の緊急事態宣言の期間になっていました。

私たちは、現在も続くコロナ禍から多くの学びを得ているはずです。その学びを整理し、これからのよりよい社会のあり方を考えていくための糧として生かしていくことが大切であると考えます。

一昨年の令和2年に映画『三島由紀夫 v s 東大全共闘 50年目の真実』を観ました。映画は、1969年の5月、東大駒場キャンパスの大教室で行われた作家・三島由紀夫と東大全共闘の学生との討論会を描いたドキュメンタリーです。本作品について、新聞や雑誌には、「言葉と言葉がぶつかり合い熱を持った時代の記録」「政治も文化も熱かった時代に、三島も学生も自分たちの生き方や考え方を懸けてバトルしている」等の批評が載りました。「時代の熱気」を感じさせる作品でした。作品を監督した豊島圭介氏は言います。

「相手の前に行き、名を名乗り、体温や汗を感じる場所で対話することの重要性を改めて感じる。」

コロナ禍によって、豊島氏の言う「相手の前に行き、名を名乗り、体温や汗を感じる場所で対話することの重要性」は、より鮮明になったと私は考えています。

○生身の人間と、(画面を通してではなく)直接面と向かって対話することは、オンラインでは決して代用できないもの、かけがえのないものである。

これは私がコロナ禍から得た切実感のある学びの一つです。私は以前、『ポプラ』第4号においても、コロナ禍から得た学びとして次の二つを挙げました。この二つも切実な学びです。

○私たちの暮らしは「現場」で働く人たちのおかげで成り立っている。「コロナ禍」の中で在宅勤務やテレワークができるのは、そのような「現場」で働いてくれる人たちのおかげである。社会は「現場」で働く人たちによって支えられている。

○パソコンやスマホの画面の向こうにある「現場」を忘れてはならない。「現場」で働く人たちを忘れてはならない。「現場」を忘れるような社会にしてはならない。

このような学びを一つ一つ確実に増やしていくことです。そして学びを多様にしていくことです。学びが多様であれば、多様な見通しがもてるようになります。それができれば、現在のような「歴史の変わり目」とも言える時代に柔軟に対応していくことができます。

イタリアの作家パオロ・ジョルダノ氏は、著書『コロナの時代の僕ら』（早川書房）で次のように述べます。「コロナウイルスの『過ぎたあと』、そのうち復興が始まるだろう。だから僕らは、今からもう、よく考えておくべきだ。いったい何に元どおりになってほしくないのかを。」

「すべてが終わった時、本当に僕たちは以前とまったく同じ世界を再現したいのだろうか。」

この言葉を常に意識しながら、今年も、未来を確かに見つけ続ける1年にしたい。その思いを、今、新たにしています。

1月の生活目標

○寒さに負けずに、外で遊ぼう

1月の学校安全指導内容

- ・凍った道・雪道の安全な歩行について知る。
- ・ポケットの手を入れて歩くことの危険度について知る。
- ・廊下と歩行の安全について知る。

1月の行事予定

☆詳細や変更は、学年だよりや学級だより等を御覧ください。

月	火	水	木	金	土	日
10 成人の日	11 午前授業 始業式 大掃除 6年身体測定 5年席書会	12 午前授業 安全指導 6年席書会 5年身体測定	13 西田 SC 給食始 委員会 1年身体測定 3,4年席書会	14 鈴木 SC 2年身体測定 6年原爆先生の特別授業 5年社会科見学 1年5時間授業始	15	16
17 鈴木 SC クラブ 短なわ月間始 3,4年身体測定	18 2年生活科見学 (郵便局)	19 C時程 4時間授業	20 西田 SC 避難訓練 1,2年放課後学習	21 鈴木 SC 連合作品展始	22 C時程 午前授業 道徳授業地区公開講座 学校公開日 書き初め展 (1H~4H)	23
24 鈴木 SC クラブ ユニセフ募金始	25 連合作品展終	26 4時間授業 研究授業	27 西田 SC	28 鈴木 SC B時程 短なわ月間終 書き初め展終 ユニセフ募金終	29	30
31 鈴木 SC クラブ (3年見学)	2/1 安全指導	2 C時程 4時間授業 小金井教育の日	3 西田 SC 委員会	4 鈴木 SC 6年中学説明会	5	6

<エール・ウィーク>

子供が自分のよさや可能性に気付き、自己肯定感を高める「エール・ウィーク」を実施します。先の見通しがもちづらいコロナ禍において、子供たちのありのままの姿を価値付け、子供一人一人にエールを送ることがねらいです。学校と家庭と地域で子供たちのよさを見付け、言葉にして伝えていくことで子供たちの自己肯定感を高めていきたいと思っています。

<本町小学校の卒業生が来校 >

◆吉田健人選手 (5年オリンピック・パラリンピック教育)

12月10日(金)、東京オリンピックに出場した吉田健人選手が5年生へ講話をしてくださいました。児童からは「『本当はサッカー部へ入部するつもりが、たまたま声をかけられてフェンシング部へ入部したところから競技人生が始まった。』と聞き、何がきっかけで、人生が開かれるかわからないと感じた。」「継続することが力になり、これからも努力し続けるとの言葉に元気をもらった。」と感想が挙がりました。

偶然にもこの日が誕生日である吉田選手を皆でお祝いする場面がありました。

また、吉田選手が本町小学校在学中に5,6年の担任だった西内先生と再会することもでき、皆が喜びあふれる1日となりました。



◆是枝嗣人様 (6年薬物乱用教室)

12月15日(水)、「薬害から守る会」実行委員の是枝様に御来校いただき6年生へ薬物の害についてお話いただきました。「ネズミの実験映像を見たり、お話をうかがったりしたことで、一度手を染めると取り返しがつかないことになると、薬物の怖さを心の底から感じた。」「予想以上に身近で、簡単に手に入ってしまうことを知り、自分の意識のもち方が大切だと感じた。」などの感想が児童から挙がり、学びを深める機会となりました。

是枝様も本校の卒業生で、子供たちへの健全育成の場面で広く活躍されています。



全校朝会では、校長先生がこれらの話に触れ、「本町小の卒業生が活躍し、母校に戻って、後輩である皆さんにお話をしてくださっている。『距離』が離れていても、『時間』でつながっている方々なのです。」と伝えました。

<訂正とお詫び>

先月号掲載の、小金井市立小学校連合音楽会の記事の中で「各学校にて開催し、その様子を撮影した動画をお互いに視聴することで鑑賞し合う形となりました。」と掲載いたしました。正しくは「市内の小学校が一堂に会する形での開催は中止になりました。」です。ここに訂正してお詫びいたします。